

今週の為替相場見通し(2025年10月20日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		149.38 ~ 152.61	150.59	149.50 ~ 153.00
ユーロ	(ドル)		1.1543 ~ 1.1728	1.1653	1.1600 ~ 1.1750
(1ユーロ=)	(円)		174.85 ~ 176.89	175.53	175.00 ~ 177.00
英ポンド	(ドル)		1.3249 ~ 1.3471	1.3439	1.3150 ~ 1.3550
(1英ポンド=)	(円)	*	200.69 ~ 203.52	202.17	199.00 ~ 204.00
豪ドル	(ドル)		0.6441 ~ 0.6532	0.6498	0.6440 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	96.26 ~ 99.49	97.85	97.00 ~ 100.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 山本 裕太郎

(1)今週の予想レンジ: 149.50 ~ 153.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

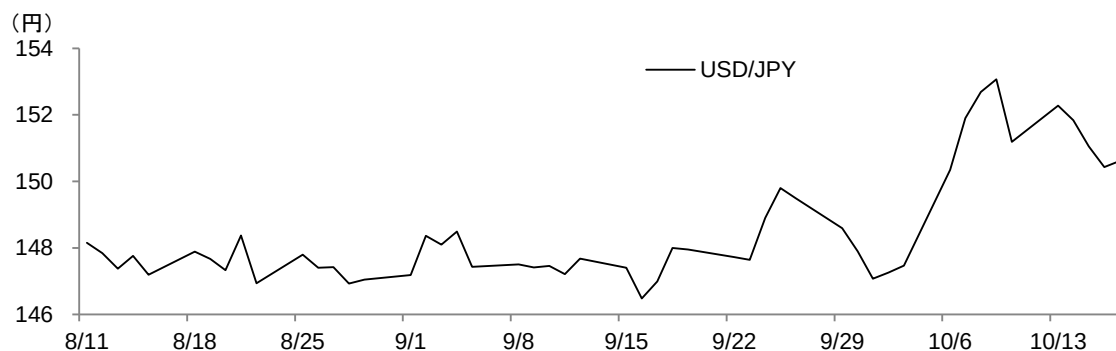
先週のドル/円は、週半ばからじり安の展開。週初13日、152.08円でオープンしたドル/円は、本邦休場で薄商いの中、151円台後半を中心にもみ合う展開。海外時間は、米中関係への懸念が和らぎ、152円台半ばへ上昇。14日は、一時週高値152.61円を付けるも、その後は軟調な日本株や米金利低下、また、中国による韓国造船企業の米子会社への制裁から米中通商懸念が意識され、ドル/円は151円台まで下落した。海外時間にはパウエルFRB議長のハト派的な発言も嫌気され151円台にて軟調な推移。15日の東京時間、高市新首相の誕生が懐疑的となり「高市トレード」の巻き戻しを受けて円買いが進んだ。海外時間にはベッセント米財務長官による「日銀の金融政策正常化により円は適切なレートとなるだろう。」との発言を受けてドル/円は下落。16日は高市新首相の誕生が再度意識され、堅調な日本株を背景にドル/円も買い戻された。海外時間には米地銀の不正融資問題や米中対立懸念を背景にリスクオフムードが広がりドル/円は150円台前半まで下落した。17日は前日の流れを引き継いだドル売りが先行し下値を切り下げ、一時週安値149.38円を付けたがその後は自民党と維新の会の連立を巡った報道からドル/円は反発。また、海外時間にはトランプ米大統領の発言から米中対立を巡る不安が和らいだ事でドル/円は買い戻され150.59円でクローズした。

今週のドル/円は堅調な推移を予想。先週はリスクオフから週半ばからじり安の展開となったが、今週は反転上昇する展開か。まず本邦では、自民党と維新の会の連立政権発足から21日(火)に開催される首相指名選挙にて高市新首相誕生がメインシナリオ、また、20日(月)には連立に向け両党が会談を行う予定で、維新が連立に向け自民党に提示した12項目には、財政拡張気味の政策が盛り込まれており、自民党が受け入れれば円売りに繋がるだろう。一方、米国では、先週発覚した地銀の信用不安問題は一時的と考えられ、また、一時開催が危ぶまれた米中首脳会談も実現に漕ぎ着けそうで、リスクセンチメントの改善からドルの買い戻しも見込まれる。注目の経済指標は24日(金)に発表される米9月消費者物価指数。OIS金利先物市場では▲25bpの利下げがほぼ100%織り込まれていることから、米9月CPIの結果がドル/円相場に与える影響は限定的か。以上の状況を鑑みると、本邦の政局不安の一服と、米国のリスクセンチメントの改善からドル/円は堅調な展開となるだろう。一方で、トランプ米大統領の来日前に円安への警戒感も高まることから153円近辺が上限と見ている。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/13~10/17)の値動き:

安値 149.38 円 高値 152.61 円 終値 150.59 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 グローバルFIチーム 袴田 慎

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1750 175.00 ~ 177.00 円

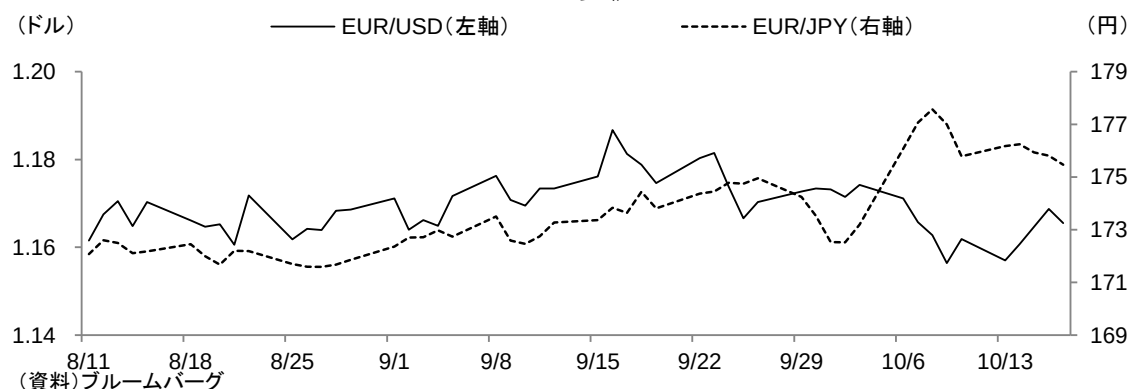
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、フランス政治の不透明感後退から上昇する展開となった。週初13日のユーロ/ドル相場は1.1602からスタート。トランプ米大統領が対中貿易姿勢を軟化させ、米中貿易摩擦の警戒感が和らいだことに加えてフランスの政治先行き不透明感からユーロ/ドルは1.1558まで下落した。14日はルコルニュ仏首相が年金制度改革を2027年まで停止すると発表したことで主要野党である社会党が不信任決議案に賛成票を投じないと表明し、政治の先行き不安後退から1.1615まで反発。15日は仏政治不安の後退や米中貿易摩擦の再燃からユーロ/ドルは1.1648まで続伸した。16日は米地銀問題を受けた米金利低下からドル安となり、1.1694まで続伸。また、ルコルニュ仏首相の不信任決議は否決となった。17日は一時週高値の1.1728まで上昇したが、S&Pによるフランス国債の格下げ報道を受けて反落。また、トランプ米大統領が中国への関税は持続可能ではないと発言したことや、米金融機関の決算で地銀の信用懸念が後退したことで反落し、1.1653でクローズした。

今週のユーロ/ドル相場は、レンジ圏内で底堅く推移するものと予想。ルコルニュ仏首相の不信任決議が否決されたことで、懸念されていたフランス政治の不透明感は一たび後退した。これは短期的にはポジティブな材料であり、ユーロ相場の下支えとなると考えられる。一方で、既に9月に大手民間格付け会社がフランス国債を格下げしているが、先週は他の格付け会社も格下げを実施しており長期的に見れば財政の不確実性は依然残っている状況。フランス国債売りとともにユーロが下落する可能性には留意したい。米中貿易摩擦懸念や米地銀の信用懸念も一旦後退しており、引き続き米国政府機関の閉鎖も継続していることから米国側の材料も限定的でレンジ圏での推移となることを見込む。但し、米中貿易摩擦に関するヘッドラインで振らされる展開には留意が必要。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/13~10/17)の値動き: (対ドル) 安値 1.1543 高値 1.1728 終値 1.1653
(対円) 安値 174.85 高値 176.89 終値 175.53



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3150 ~ 1.3550 199.00 ~ 204.00 円

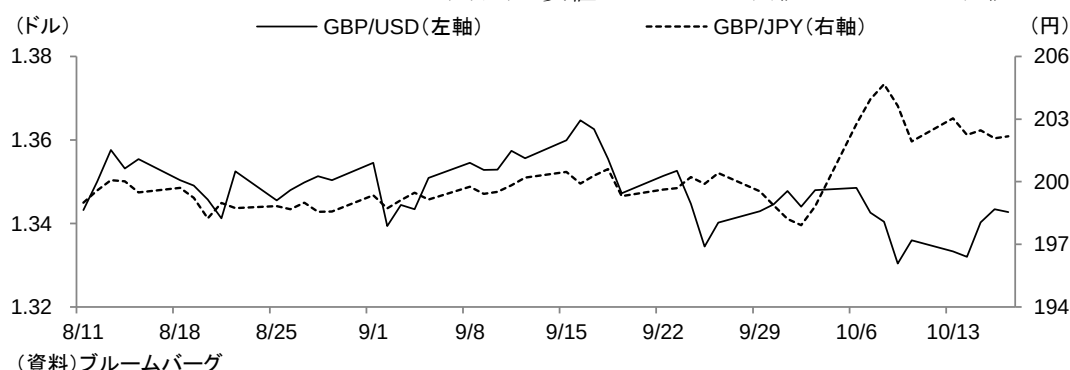
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は上値重いながら上昇。週初13日は1.33台半ばで始まる。米中の貿易摩擦の再燃懸念がひとまず小康する中だったが、日米の休場もあつてか動意薄。14日は英8月までの失業率が予想を上回る中、1.32台へ売られるも、米中摩擦を懸念してかドルが弱含むと切り返す。15日もドルの弱含みは続き、1.34台へ反発。16日には英8月の単月GDPが予想通り+0.1%となるも反応薄。米地銀の信用懸念で米株が下落すると、17日は1.34レベルへ下落。先週の英ポンドは対円で下落。週初13日に202円台後半で始まる。14日の英8月ILO失業率後に201円台へ。英ポンドの反発に連れて16日には203円台へ上昇。17日はリスクオフで円買いとなると、英ポンドの下落も手伝い200円台へ急落した。その後、米株先物が反発に転じると、円買いも反転し202円レベルまで急反発する荒い展開だった。

今週の英ポンド相場は、上値重い推移継続を見込む。英指標面からは22日(水)の英9月消費者物価指数、24日(金)の英9月小売売上高と英10月各種PMI速報値あたりが注目される。先週、ベイリー英中銀総裁は、労働市場に懸念を示しつつ英経済がそのポテンシャルを下回っている、と述べた。昨年の英政府秋季予算で英企業の社会保障費負担が増加し、企業が採用を絞っていることが労働市場の緩みの原因と広く言われている。来月に予定される秋季予算では、リーブス英財務相が増税と歳出カットを発表するだろうとの分析も出されており、英経済のさらなる下押し材料として懸念される。一方で、米中摩擦、米政府機関閉鎖、さらに米地銀の信用懸念などでドルにも下押し圧力も相応にあり、ボラティリティが高まる可能性はあるが方向感が出にくい。オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティは今週の対ドル変動を上下に1%弱織り込んでいる模様だ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/13~10/17)の値動き: (対ドル) 安値 1.3249 高値 1.3471 終値 1.3439
(対円) 安値 200.69 高値 203.52 終値 202.17



4. 豪ドル

国際為替部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 0.6440 ~ 0.6600 97.00 ~ 100.00 円

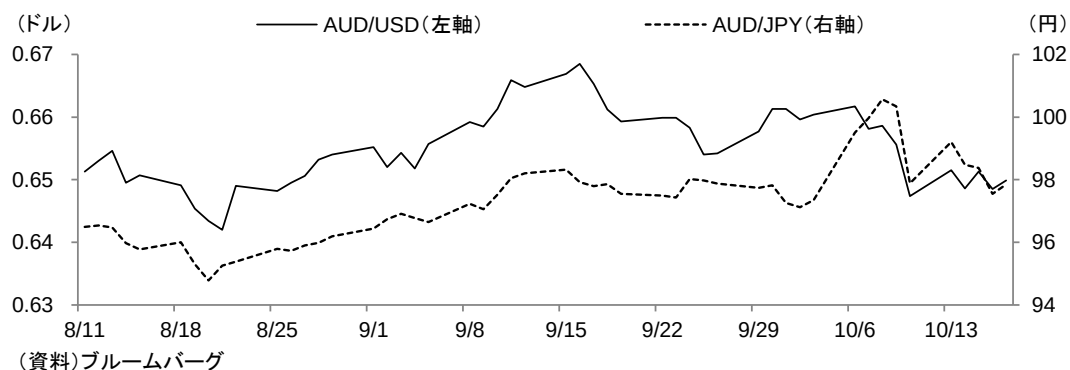
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは、売られたものの買い戻しが入り一進一退の様相。週初13日、豪ドルは休場で薄商いの中米中通商行儀への期待を背景にやや上昇。週高値である0.6532を付けた。14日、9月のRBA議事要旨が公表され、中国の景気後退等外部要因によるリスクを懸念する表現から売られて一時週安値である0.6441まで下落。米国時間には買われて半値戻しとなった。15日、豪9月ウェストバック景気先行指数(前月比)は予想対比堅調。豪ドルは買われ、1日ぶりに0.65台を回復。16日、予想対比軟調な豪9月雇用統計が公表されると豪ドルは下落で反応。しかしすぐに買いされるなど為替への反応は限定的にとどまったが、RBAの次回利下げ織り込みが0.4回から0.8回弱へ上昇した。17日、アジア時間は人民元の下落に連られて一時0.6450を割り込む水準まで売られるものの、その後欧州時間では0.6500を超えて急騰するなどやや荒い値動きが続く。その後は高値圏で推移し、0.6498で越週。

今週の豪ドルは、底堅い展開を予想。24日(金)にブロックRBA総裁の講演及び米9月CPIが公表予定となっている。市場は現在次回11月RBAでの0.8回程度の利下げを織り込んでおり、総裁の講演から次回の利下げに対する距離感を測ることになるだろう。とはいえ先週公表された豪9月雇用統計が軟調であったことからよほど利下げに対する反対表明などない限りは材料にならないか。米国は、依然として政府機関の一部閉鎖が続いており、米経済指標の公表が延期されているうえ、今月末のFOMCを控えブラックアウト期間に入っているなど米国の経済政策を巡っては不透明感が増している状況。市場は現在、次回FOMCにおいて1.0回の利下げを織り込んでおり、遅れて公表される経済指標が予想対比堅調であったとしても今会合での利下げ方針は変更しないものと思われるものの、来年以降の利下げ織り込みがはがれてドル高から豪ドルが下落するリスクには注意したい。大きな材料が少なく、基本的には来週のFOMCに向けてのポジション構築など思惑の絡んだ売買がもみ合いそうな展開を予想。テクニカル的には一目の雲のねじれを過ぎ、かつ下落して雲に突入した弱気のドル指数に対して雲の下側にいる豪ドルは0.64台のサポートラインを底値に、0.65台半ばに構える雲の下限を突破できるかが焦点になるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/13~10/17)の値動き: (対ドル) 安値 0.6441 高値 0.6532 終値 0.6498
(対円) 安値 96.26 高値 99.49 終値 97.85



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。